

令和7年度 松江養護学校 重点目標と評価

学部等	評価計画		自己評価		学校関係者
	重点目標	評価指標	実績(%)	分析・評価・達成状況 (記述)	次年度に向けた課題・方向性 (記述)
小学部	【グランドデザイン】 ①知的障がい教育の専門性を向上させる。	①4月に比べ、知的障がい教育の専門性を向上させることができたと感じた教員が80%以上	95%	目標80%以上を達成できた。研修が有効との言及が半数以上あり、研修の重要さが分かる。その他、話し合い、研究協議、実態把握、自己研鑽が有効だった。	ミニ研修会を継続し、ニーズに応じた研修会も設定する。話し合い、協議の時間を引き続き大切にする。
	【学部独自】 ②子どもの「知りたい、学びたい、やってみたい」を引き出す授業づくりを行う。	②子どもの「知りたい、学びたい、やってみたい」を引き出す授業づくりを行うことができたと感じた教員が80%以上。	95%	目標80%以上を達成できた。テーマに沿って日々話し合い、振り返りに真摯に取り組み、よい授業づくりができた。	よかった実践、教材を、共有ドライブで共有、引き継ぎができるようにする。
中学部	【グランドデザイン】 ①生徒が自分の考えを様々な方法で出し、計画し、実行できる支援を行う	①生徒が自分たちのやりたいことを実現するための支援ができたと感じた教員が70%以上	96%	生徒の言葉を聞いたり、様子を見たりしてやりたいことを知らうしたり、興味関心を引き出すための選択肢を準備するなど生徒の意思を尊重した。	中学部全体で、今後も引き続き生徒の意思を尊重した教育教育活動を大切にしていきたい。
	【学部独自】 ②生徒が主体的に課題発見、課題解決できる授業をめざした取り組み。	②生徒が主体的に課題発見、課題解決できる授業づくりができたと感じた教員が70%以上	68%	この重点目標の内容が漠然としているところがあるので、もう少し具体的な目標設定と学部での周知が必要であった。	学部で話し合いを重ねながら、生徒がよりよく課題発見し、よりよく解決するための方法などを考えていきたい。
高等部総合コース	【グランドデザイン】 ①生徒の主体性を育み、夢や目標をもって意欲的に取り組む生徒を育てる。	①生徒のつきたい力をイメージした授業づくりや生徒が自分でできるように支援を考えて実践できたと感じた教員が70%以上	89%	中間評価では、実際に成果として見えにくい・見られにくいという回答もあったが、継続して授業づくりを学級等でしっかり考えて取り組んだことや、生徒の実態を把握し、支援ができたことが成果として見られるようになり、評価につながった。	生徒自ら、やりたい・やってみたいことを発信できるような授業の組み立てや支援を考え、教員も一緒になって学が姿勢で取り組む。 体験的な学び・協働的な学びを通して、自己理解を深めたり意欲的に取り組んだりできる学習計画を立て、実践していく。
	【学部独自】 ②保護者・関係機関と連携を取りながら早めの対応に心がけ、支援体制を整え、支援・指導にあたる。	②関係機関と連携した取り組みや、学部で情報共有してチームで支援等について取り組んだと感じた教員が80%以上	90%	困難事例が多く、関係機関との情報の共有はできて前向きな取組や支援には繋がりにくい状況はあるものの、少しずつ良い方向に繋がってきている。また、学年主任や担任の先生を中心に積極的にケース会を実施できた。	困難事例については、来年度も継続したケース会を実施していく。可能などころで、学期に1回は生徒の近況報告と今後の方向性を確認できる会(管理職の先生と)を設定したい。 教育相談とより連携を図り、関係機関と広く繋がっていくようにする。(学が環境の設定の検討含む)
高等部職業コース	【グランドデザイン】 ①夢や目標をもち、主体的に学ぼうとする生徒の機動力を育てる。 ①他者評価等を利用し、生徒の自己理解の促進をめざす。	①生徒がよりよく生きていくために自立活動的視点をもった理解と支援を行うことができたと感じた教員が80%以上	69%	・生徒の課題を意識しながら自立活動の視点をもちかわることはできた。自立活動の必要性も理解している。	・個々の生徒に必要な支援で取り組めていたかどうかは課題もこのころ。横の連携を取りながら学部全体として生徒にかかわることが必要。中心課題、支援の共有について深める。
	【学部独自】 ②作業学習のねらいを整理し、作業種目を活かしながら生徒の主体的な取り組みを引き出す。	②生徒が将来職業生活を継続する上で必要な自己の要件について認識を深めるための支援と教員間の共有を行うことができたと感じた教員が80%以上	91%	・学年が上がるごとに、「社会人になる」ということ具体的な見通しや意識は高まる。作業学習等では生徒が主体的に取り組める場を設定するとともに、課題解決のための支援等について教員間で共有することができた。	将来の自分の姿と高等部での学びを結び付けて考えることが難しい実態もある。生徒の実態を考慮し、今学んでいることがこの先どんな場で活かせるのか、具体的なイメージをもてるように支援していく。
高等部安来分教室	【グランドデザイン】 ①「地域とつながる力、地域で心豊かに生きる力を育む授業づくりを行なう	①育む力を伸ばす授業づくりを行うことができたと感じた教員が80%以上	100%	・数値目標は、十分に達成できた。地域と連携を図り、生徒たちが「やってみたい。地域の役に立ちたい。」という思いを授業に取り入れて進めることができた。	・地域連携の強化：引き続き、高校魅力化推進員の方との協力体制を強化し、より多様で専門的な視点を取り入れた活動を展開していく。 ・生徒の主体性の追求：生徒の「知りたい」「もっとやってみたい」という知的好奇心や意欲をより一層引き出すための工夫をしていく。 ・PDCAサイクルの徹底：活動の振り返りを行い、次年度もPDCAサイクルを回しながら、授業の質を継続的に向上させていく。
	【学部独自】 ②生徒の主体的な取り組みを促す作業学習を目指し、見直しを図る	②作業学習について見直しを図ることができたと感じた教員が80%以上	100%	・意欲を引き出す工夫：生徒の「やりたい」という意欲にフォーカスし、主体的・対話的で深い学び(作業学習版)につなげていきたい。 ・デュアル実習の定着：実習の仕組みを安定させ、地域社会との接続をより確実なものにしていく。 ・PDCAの継続：授業改善を一時的なものにせず、2年目としてさらに精度を高めていく。	
寄宿舎	【グランドデザイン】 ①生徒が主体的に考え行動するための舎生会組織の構築。	①生徒の主体性を促すための支援を検討し実践することができたと感じた教員が70%以上。	100%	研究指導員等で『主体性を引き出すための支援』を指導員間で検討し、考え方を共有した上で役員会を運営、及び研究を進めることができた。	次年度は今年度の取組で指導員が共有した『主体性を促すための支援』を、役員会だけでなく全体会や舎生個人の支援に拡げていきたいと考える。
	【舎独自】 ②-1 寄宿舎と学校間の情報共有・双方の共通理解のもと、生徒・家庭への適切な指導・支援に努める。 ②-2 生徒一人一人が集団生活におけるルールやマナーを守り、思いやりをもって生活する姿勢を育む。	②-1 適切な頻度・方法で寄宿舎と学校間の必要な情報共有を行うことができたと感じた教員が70%以上	100%	月一回の寮務部会に加え、チャットや情報共有の時間(月2回程度)を活用・設定したりしながら、生徒情報や必要な検討事項について共有しつつ、学舎間での連携を図ることができた。	今年度、寮務部会のメンバー変更や会の記録の共有をチャットで行う等の変更を試行的に行った。次年度に向けて連携・共有のし易さを基に振り返りを行い、必要に応じて改善できるようにする。
		②-2 一貫した生活指導について学校・寄宿舎双方における共通認識を図ることができたと感じた教員が70%以上	100%	「自動販売機利用のルール」や「忘れ物・服装等」について生徒支援部と確認し、舎生と通学生との間で指導内容に差が生じないように内容を整理し、学舎会等で共有することができた。	整理した内容を来年度以降も継続して引き継いでいくことができるように、各所で年度初めの確認や共有を徹底できるようにする。

・校内教職員が自身が所属する学部等について、「十分に達成できている」「おおむね達成できている」「あまり達成できていない」「どちらかといえば達成できていない」「よくわからない」より選択して評価した。そのうち、「十分に達成できている」「おおむね達成できている」を合わせて、実績として集計している。